

# 知

# の

知の世界を広げてくれる出発点となります。

一つの「学び」から得た発見が、

## 学びの場を楽しみ尽くす “三かく”の効用



授業では、受講生が中国古典を音読しながら学ぶ



村山先生の人柄に魅せられ、通い続けている受講生も多い

教える人

村山 吉廣 先生

講義内容

「中国古典を読む」  
「原音と朗読で楽しむ漢詩」

### 「世

界最古の詩集である『詩経』には、当時の人々の暮らしや政治批判、出会いの喜びや別れの悲しみなどが、約300篇の詩に歌われています。その内容は、時代も国も遠く離れている私たちにも共感できるものです。正しく解釈するためには、当時の社会制度や習俗、宗教などを知るだけでなく、他人の感情を理解する人間性の豊かさも問われます」と長年の研究テーマの魅力を熱く語る村山先生。さらに、中国古典が日本文化に与えた大きな影響についてこう説明します。

「江戸時代、日本人に読書習慣が浸透し、文字に親しむ社会が形成されたのは、藩校や私塾で四書五経の講読が行われていたからです。近代化においても、ヨーロッパ人が持つてきた洋書が抵抗なく読書対象となった結果、西洋文化がすばやく受け入れられました」

「受講生には、まず、『三かく』の話をしていきます。教室まで来るのに汗をかき、人前で当てる読まされ恥をかき、ノートに字をかく、その効用か、皆さん、青春時代に戻って授業を楽しんでくれています。『三かく』は老化防止にもなりますね笑)」

最後に、傘寿を過ぎた今も精力的に研究を続けている村山先生に自身の目標についてお聞きしました。

「中国古典を読む」は、20年以上続けられている長寿講座。中国古典の王者である『論語』の完読を目指す講座です。1回1ページのペースで読み進め、完読した受講生や「十年受講」の方には先生から表彰状が贈呈されます。教室以外でも中国旅行や日帰り遠足が企画されています。「遠足では、学んだ知識を生かし、クラスの地場産業として各地の頌徳碑を解説し

「日本で独自の発展を遂げ、日本文化の形成に寄与してきた漢学を追随し『日本の藩校』という本を書いています。また、受講生の皆さんと一緒にフィールドに出て、一つでも多くの漢文碑文を解説していきたいと思っています」

「江戸時代、日本人に読書習慣が浸透し、文字に親しむ社会が形成されたのは、藩校や私塾で四書五経の講読が行われていたからです。近代化においても、ヨーロッパ人が持つてきた洋書が抵抗なく読書対象となった結果、西洋文化がすばやく受け入れられました」

「受講生には、まず、『三かく』の話をしていきます。教室まで来るのに汗をかき、人前で当てる読まされ恥をかき、ノートに字をかく、その効用か、皆さん、青春時代に戻って授業を楽しんでくれています。『三かく』は老化防止にもなりますね笑)」

最後に、傘寿を過ぎた今も精力的に研究を続けている村山先生に自身の目標についてお聞きしました。

### プロフィール

1929年生まれ。早稲田大学文学部大学院修了、早稲田大学名誉教授。中国古典「五経」の一つ「詩経」を研究。特にその解釈学史を専攻する。『書を学ぶ人のための唐詩入門』（二玄社）、『詩経の鑑賞』（二玄社）など著書多数。

### 村山先生の 学びの提言

おすすめ図書  
～私の本棚から～



『詩経』

目加田誠著

講談社学術文庫 定価 945円

現代思想に大きな影響を与えた中国古典の一つ「詩経」の味わい方を懇切丁寧に指南してくれる名著。初心者におすすめ。



『漢学者はいかに生きたか  
〈近代日本と漢学〉』

村山吉廣著

大修館書店 定価 1,890円

日本の近代化に大きな役割を果たした漢学について、明治・大正・昭和にわたる8人の漢学者たちを取り上げて紹介している。

# 開拓

どのように学びを広げていくか、教える人と学ぶ人、それぞれの学門分野について  
 学びの出発点とこれまでをお聞きし、そのヒントを探してみました。

## 楽しみながら学び続ける 誰にも負けない人生



大隈講堂の前で

加藤さんの書。論語の中の名言

学ぶ人  
**加藤 友一**さん  
 (1981年入会)  
 受講内容「中国古典を読む」

加藤さんの  
**学びの履歴書**

● 受講科目  
 1983～2010 「中国古典を読む」

「いつか勉強したい」と思っていました。私た  
 ちの若い頃は、戦時中のこと  
 で、勉学を思うにまかせない時代でした。  
 しかも、大学

に進学できるのはごく少数の恵まれた人だけでした。長女が早大生だった時に、エクステンションセンターが開設され、そんな学校があるなら一刻も早く学びたいという思いで、定年を待ちきれずに1年早く退職してしまいました」

加藤さんは、職場の同志と書道の会(高陽書道研究会)を立ち上げ、80歳の時に解散するまで中心メンバーとして活動してきました。現在も、床屋さんが毎朝剃刀を研ぐように、必ず毎朝硯を洗い清め、『論語』や『詩経』などの古典の一節を書いているそうです。

「書道をやるからには、ただ字を書くのではなく、内容を学ばなければならぬ」という子どもの頃からの父の教えがあり、中国古典に関心を持つようになりました。たまたま通りかかった教室で、石碑の拓本を使って講義をしている村山先生をお見かけし、この先生に学びたいと思っから、27年間受講し続けています」

加藤さんが好きな言葉に「子曰わく、これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず(孔子は言った。あることを理解している人は、それを好きな人にはかなわない。あることを好

きな人は、それを楽しんでる人にはかなわない)」があります。

「トリノオリンピック金メダルの荒川静香選手が演技終了直後のインタビューで「楽しませてもらいました」と言った言葉に感動し、この言葉を目指しました。学問も同じで、楽しみながら学ぶことが大切です。それを教えてくださったのが村山先生であり、『論語』でした。村山先生は各地の顕彰碑を読む活動や、地方の昔の漢学者の足跡を訪ねてその業績を明らかにする研究などを続けていらっしやいます。それが、その在野の精神を重んじる早稲田の学問だと思います。

拓本を読む宿題は、家にある全13巻の大漢和辞典と首つびきで1週間かけて予習しています。村山先生との邂逅により、独学ではできない、本当に良い勉強をさせていただいていると思います。14歳の時、柳行李一つで上京し、学びたいという思いをこらえながら40年間勤め、退職後に「老勉」でも学校に通うことができ、楽しくて本当に感謝しています。自分自身では誰にも負けない人生だと思っています。「学びて時に之を習う。亦た説ばしからずや」—『論語』冒頭の一句は、『論語』究極の一句と言えましよう」